

〔園芸〕

施設キュウリの摘心栽培に関する研究

(第2報) 半促成栽培における設定温度について

利光泰郎・野口敏治・藤枝国光 (大分県農業技術センター)

TOSHIMITSU, Y., NOGUCHI, T. and FUJIEDA, K.

Studies on the Topping Culture of Cucumber Plants in Plastic Greenhouses.

(II) Effects of Night Temperature on Growth in Semi-forcing.

前報において、施設キュウリの摘心栽培における品種の適応性を、ハウス抑制栽培および半促成栽培で検討し、雑種群品種の有利性を報告した。ここでは、半促成栽培における設定温度について品種との関連で調査した。

I 材料および方法

「さつきみどり」・「U-1」・「U-2」・「久落H型」を12月31日には種し、フィシフォリアにつき木して、2月6日に定植した。仕立て法は主枝1本仕立ての22節摘心とし、子づるは2葉、孫づるは1葉で摘心した。温度の設定は、気温について高夜温区(最低気温13~15℃)と低夜温区(10~12℃)を設け、それぞれの区に高地温区(地温18℃)および低地温区(15℃)を設けた。気温は温風暖房機、地温は電熱線により加温し、昼間は換気扇を利用して25~30℃を目標に管理した。

II 結果および考察

(1) 主枝の生長では、各品種とも高夜温・高地温区 > 高夜温・低地温区 ≥ 低夜温・高地温区 > 低夜温・低地温区の傾向が認められた。品種間では「さつきみどり」が節間がつまり伸び悩んだ。

(2) 側枝の発生率は71~86%の範囲であったが、各品種とも低夜温区の発生率が高夜温区のそれにまさり、高夜温区では低地温に保ったほうがやや多かった。子づる2節までの平均長は各品種とも高地温がまさり、「久落H型」が明らかに長く伸びた。

(3) 総収量は各品種とも高夜温下では低地温区が低夜温下では高地温区がまさり、低夜温・高地温区が共通して増収した。品種間では「U-1」 > 「久落H型」 > 「U-2」 > 「さつきみどり」の傾向が認められた。

以上のように、摘心仕立てによる半促成栽培では

「久落H型」のような華南系春キュウリでも一応の収量がえられるが、側枝の節間が長くて徒長的な傾向が強く、後期には果実の品位・肉質が劣るなどの欠点があり好ましくない。前報でも報告したように華北系夏キュウリの血を引く雑種群品種が生態的にみて有利である。半促成栽培における、これらの品種に対する設定温度は、気温10~12℃、地温18℃あたりが適当と思われる。しかし、夜間温度については、変温管理の効果をさらに検討してみる必要があるだろう。

第1表 設定温度が生育・収量におよぼす影響

項目 (品種)(夜温)(地温)	つるの長さ		側枝		株当たり収量*		
	主枝 22節	側枝 2節	発生数	果数	果重		
さつき みどり	13~15	18 15	158 148	9.9 7.1	15.8 15.0	36.0 37.1	3.63 4.12
	10~12	18 15	146 142	9.2 7.0	16.5 16.2	40.6 36.5	4.60 3.94
U-1	13~15	18 15	200 184	6.2 3.4	14.6 15.2	46.1 46.0	5.06 5.39
	10~12	18 15	177 165	6.7 4.7	15.6 14.6	52.5 47.8	6.16 5.51
U-2	13~15	18 15	184 167	4.7 3.8	14.0 15.3	36.8 38.0	4.11 4.28
	10~12	18 15	160 150	7.1 3.9	15.4 16.4	42.4 37.4	4.78 4.55
久落H型	13~15	18 15	189 181	16.9 13.6	13.5 14.6	43.1 43.2	4.73 4.48
	10~12	18 15	180 166	21.0 16.6	14.4 15.2	49.3 43.1	5.69 4.61

*6月21日まで調査